ゴーレムマイスター

志冥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーレムマイスター

【Ｎコード】

Ｎ６９４１Ｙ

【作者名】

志冥

【あらすじ】

駄目な兄と優秀な弟が土機兵（ゴーレム）に出会った事がきっかけで異世界へと飛ばされる。その世界は自分達がいた世界とよく似た多元世界だった。しかし、魔科学（まかがく）が発達したその世界には魔法練成なる技術が存在した。兄弟は元の世界に帰る事ができるのだろうか？　そして何故召喚されたのだろうか？　コミカルな風味を醸し出しつつもシリアスに描く多元世界転生の魔法ファンタジーです。感想、評価をお待ちしております。

プロローグ

「兄さん、右腕の動きが変だ。魔力はしっかり供給されてる？」
「――んな事言ったって、うわっ。」
土と金属を混ぜた様な不思議な材質で作られた操縦席。
中央には水晶玉みたいな大きな紫色の玉。
尻が座面から飛び上がるほどの縦揺れの中、俺はその玉にしがみ付き、訳も分からず強く念じる様に力を込める。
紫の光がその光を増していき、その丁度真上に表示されるモニターに映される人型の映像に光が染み渡っていき、暗かった右腕部分も光を帯びた。
「――な、何とかいけそうだ、おらぁ！　跳べぇ！」

内臓が浮き上がるみたいな感覚に少々の吐き気を催す。
操縦席左右壁面と正面にあるモニターの奥壁面から見える外の風景が上下したかと思えば、広大な景色が眼下に広がる。
内臓が暴れまわったせいなのか、興奮しているせいなのかわからないが、胸が煩い位に高鳴っている。
「兄さん、前！　前、前！」
激しい衝撃と共に、更に激しく揺さぶられた内臓と脳。
目の前の広大な景色は一瞬にして星空に変わる。
奇妙な操縦席から引きずり出され、今だ焦点の定まらぬ俺の視界にぼんやりと映るのは俺を心配そうに見つめる我が可愛い弟。

「兄さん、大丈夫？　怪我はない？」
「お、おう。死んだ婆ちゃんにちょいとばかし会って来ただけだ。」
「お婆ちゃんは死んでないでしょ。――それより、すごいね、この……」
弟が俺と共に巨木へと激突したソレを見つめる。

操縦席と同じく、土で出来ているのか、金属で出来ているのか、不明瞭な巨体。
かなりの高さから猛スピードで落下し、巨木に激突したにも拘らず、操縦者共々無傷なのは脅威的と言えた。
「――これが、俺の……土機兵。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

山道を走るバスの中。
二時間に一本という信じられない程に怠慢なバスを寸での所で乗り逃し、二時間待ってやって来たバスにやっと乗った俺と弟は祖母の家へと向かう道中だった。
事故で両親を亡くした俺達は唯一の身寄りである祖母に面倒を見てもらう事になっている。
祖母は偏屈な変わり者で人里離れた山の中に住んでいた。
祖母には一度として会った事はないが、高校二年の俺と、今年中学を卒業したばかりの弟では二人で生活するには思い切りが必要で、思い切りの足りない俺は祖母を頼る事に決めた。
俺と違い素直な弟は、俺の決断に異を唱える事なんて滅多にない。けれど、嫌な顔一つせず、俺に従う弟を見ていると少し胸が痛んだ。

俺と正反対で優秀な弟は有名私立に特待生枠で入る予定だった。
最初は俺も「お前は折角いい高校に受かったんだから、こっちに残った方がいい。向こうでバイトすればお前一人の生活費くらいはなんとか捻出してやるよ。」なんて兄貴らしい事も言ってみたものだが、流石に非の打ち所のない弟は「兄さんと一緒なら高校はどこだって構わないよ。僕がいたい場所はいい高校なんて所じゃなくて、

兄さんと一緒にいられる所だから。」なんて、もしも妹であればうっかり一線を越えてしまいそうな殊勝な発言をした。
そんな訳で俺は珍しく発揮した兄貴らしさをあっさりと引っ込めて弟を連れて行く事にした。

終電まで走破したオンボロバスを降りると、年に2、3人は遭難者が出ていそうな森の中。
携帯を開けば当然の様に圏外。
時折目の前を横切る虫は拳ほどではなかったにせよ、都会育ちの俺の目にはそのくらいの大きさに映った。
「一応、婆ちゃんの手紙には地図が載っていたんだが……」と言って、弟に差し出す。
その手紙を見て、弟の顔が青褪(あおざ)めていくのが分かる。
かなり大雑把(おおざっぱ)に描かれた地図だとは思ったが、物事をあまり深く考えない俺は着けばその地図で分かるものなのだろうと安易に考えていた。
それがそもそもの間違いで目の前に広がるのは土と木だけで方角すら分からない。
地図に描いてあるのは俺たちのいるバス亭と大きな木、そして『この辺』と書いて矢印の引いてある民家と思わしき絵。
目に付く木はすべて樹齢何年か、というくらいの巨木ばかりでどれが祖母の言いたい大きな木なのかさっぱり分からない。
「と、兎に角歩こう。」
「――兎に角歩いちゃったら、絶対遭難しちゃうよ！」
最もな言い分だ。

「何だか喉が渇いたからアイスが食べたいよな。」
俺達はそのままバス亭のベンチに座り込んでいた。
弟は俺の言葉を無視したまま、何とか解読しようしているのか祖母の茶目っ気溢れる地図を睨み付けている。

「俺達、このまま死んじゃうのかな？」
「兄さん、ちょっと黙っててよ。それにここから動かなければ、最悪引き返す事もできるでしょ？」
「まぁな……しかし、ここで一泊はしなけりゃいかんけどな。」
「――へ？」
優秀な弟には珍しく素っ頓狂（とんきょう）な声を上げる。
地図の解読に夢中になっていたせいか、時刻表を見ていなかったのだろう。
俺はする事もなく、時刻表を眺めていたから知っている。
さっき俺達が降りたバスが本日最後の一本だった事を。
弟は一層必死になって地図に齧（かぶ）り付いた。

陽が落ち、辺りを黄昏が包み始める。
明らかに焦り始める弟を横目で見る俺。
こんな時、駄目な兄貴でよかったと思う。
窮地に直面した時、弟が不安そうにすると皮肉な事に俺の頭は段々と冷静になり、心は穏やかになっていく。
「さぁて、頭を使うのはやめて、今度は身体を使うか。」
俺はそう言って弟の肩に手を引いた。
鞄からスナック菓子を取り出して、それを道々落とし、目印にして迷わない様に歩いた。
「兄さん、これ動物とかが食べちゃったら目印なくなっちゃうんじゃない？」
「大丈夫だ、こんな事もあろうかと、『すっぱイーヨ梅じそ味』を持ってきた。動物は『すっぱイーヨ』は食わねぇだろ？」
「そうだね。それなら安心だ。」
弟がバスを降りて以来初めて笑顔を零した。
俺はそれに笑い返して、先に進む足を速めた。
本当に動物が『すっぱイーヨ梅じそ味』を食べない保証は勿論（もちろん）ないが、そうでも言わないと弟が不安に思う。

と言うよりも、そんな事は弟も重々《じゅうじゅう》承知だが俺がそんな馬鹿な冗談を言う事で弟は落ち着きを取り戻してくれる。
出来た弟の事だ、馬鹿な兄貴を護らなければと思うのだろう。
本当に駄目な兄は責任を持って必要以上に駄目な振りをしなければならない。
少なくとも俺と弟はそうやってバランスを取っている。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

すっかり陽は落ちて暗くなった森。
唯一の救いは、晴れた空に浮かぶ満月が辛うじて視界を残してくれている事。
それとスナック菓子の『わさびポーク』を持ってきていた事。
無くなった『すっぱイーヨ』の代わりに『わさびポーク』を落としながら、暗い森を歩く。
何処からともなく、梟の鳴き声が聞こえる。
ほんの何日か前に魔法使いの映画を見ていて、主人公の相棒である白い梟がこんな風に鳴いていたから間違いない。
2、3kmほど歩いただろうか、人里は見えず、辺りの木々が更に鬱蒼と生茂り、目にした事のない草花が目立つ様になってきた。
「クソ婆ぁ、あの絵心溢れる地図は方角だけは合ってんだろうな。信じてるんだからな。」
疲れの所為もあり、苛立ってきた俺は悪態を付き始める。
道はどんどん細くなっていくし、心なしか山道をずっと登り続けている気がする。
「今、何か光らなかった？」
「――あん？　俺には見えなかったぞ。」
「確かに光ったよ、向こうの方で……」

弟は木々の間を指差すが、暗がりで数m先も満足に見えない状況では何があるのかわからない。
ハッとして、辺りの手ごろな木の枝を手に取り構えた。
『もしかしたら、獣か何かの目が光ったのかもしれない。』
声には出さなかったがそう思った。
弟も感じているのだろうか、俺の裾を強く握り締めている。
「だ、大丈夫だ。兄ちゃん、喧嘩だけは強いの知ってるだろ？」
『しまった、声が震えた。』と後悔したが、弟は気付かなかったのか、それとも気付いていない振りをしてくれたのか分からないが「頼りにしてる。」と俺の顔を見返してほほ笑んだ。
本当に出来た弟である。
妹ならば獣に喰われて、この世を去る前に！　と勢いに任せて押し倒している所だ。
けれど、獣ではなく、民家か何かがあるのかもしれない。
森の中では、その確率も低いが、万が一にもと考えると容易には去れない。
俺達は光の見えた方へとゆっくりと近づいて行った。

そこには崖なのか、植物の集合体なのかよくわからない、草木に覆われた丘が聳(そび)え立っている。
目を凝らしてよく見ると、草木の隙間から金属の様な物が見えた。
光の正体はその金属が月明かりを反射したからと思われた。
俺は絡まっている蔓(つる)を引き剥がし、その金属を掘り起こそうとした。
かなり大きいソレは完全に草木に絡まれており、少し剥がしたくらいではその全容を現さない。
金属と土の様な素材で出来たそれに、何か文字が書かれている。
かなり古いものなのか、その文字は掠(かす)れていて、辛うじて一行読める程度だった。
「虚構(きょこう)よりも真(まこと)の現実を……」
「兄さん、これは一体？」

言い知れぬ不安感が湧きあがる気がした。
弟もそうなのだろう、少し声が震えている。
けれどそれと同時に湧きあがる探究心が、纏わりついた蔓を更に剥がさせた。
ある程度剥がすと、それが人型をしている物だと分かった。
無我夢中(むがむちゅう)で蔓を剥がし続け、その全容が明らかとなる。

「なんだ、こりゃ……。」
巨大な人型の建造物。
体長は三メートル程だろうか、少なくとも俺と弟の倍くらいの大きさはある。
頑丈そうな不思議な素材でできた身体。
まるでSF(エスエフ)映画に出てくるロボットだ。
文字が書いてある部分の下には紫色の水晶玉の様な物が付いている。
そこだけ明らかに違う素材で出来ていたので俺は何気なく、その玉に手を触れた。

すると触れた部分が強烈な光を放ち始め、周囲の大気を吸い込む様にそれを中心に風が吹き荒(すさ)ぶ。
恐怖を感じ、手を放そうにも不思議とその手は離れない。
「ふ、ふざけんな、なんだよこれ。」
懸命に引っ張るが、玉に吸いつく様に俺の手は離れようとはしない。
弟が後ろから腰に手を回して一緒に引っ張るが、二人がかりでも一向に離れる気配はない。
「何だか、やばそうだ。お前は早く離れろ！」
「兄さんを放って離れられるわけないだろ！」
さらに強い光が瞬(またた)き、視界を奪われる。
そして身体が宙に浮く様な感覚の直後、何かが炸裂した様な音と共に俺は身体を吹き飛ばされるような感覚に襲われた。

001

薄っすらと目を空けるとそこは木々の生茂(おいしげ)る森の中。
何かが爆発した気がして、死んだと思ったが生きているし、身体もどこも痛まない。
周囲もなんら変わらず、陰気な森の中のまま。
ただし、かなりの時間気を失っていたのか、すっかり朝日が昇っている。
傍に倒れていた弟も目を覚ます。
「――に、兄さん？　僕達一体？」
「どうやら、何ともないみた――」
それに気づいた俺は驚きに声が詰まらせた。
気を失う前にあったはずの、巨大な人型の建造物が跡形もなく消えている。
目を擦(こす)って確認するが、やはりないものはない。
「どこに行っちゃったんだろう？」
「さぁな。この風景からして、俺達がふっ飛ばされたわけでもなさそうだし、あの巨人が勝手に何処かへ行ったとしか思えないな。」
「あれって、動くの？」
「さぁな。俺が知るわけないだろう。それより、婆ちゃんがきっと心配してる、陽のある内になんとか辿り着こうぜ。」
歩き出して、すぐに一つの疑問が浮かんだ。
ばら撒いてきたスナック菓子が一欠(ひとか)けらもない。
まさか本当に動物が食べたのか？　と特にそれ以上は気に留めなかったが帰り道がわからなくなったのは少し不安だ。

一時間程、当てもなく歩き続けた所で「兄さん、あれって。」と弟が何やら上の方を指差している。
その方向へと視線を向けるとそこには周囲の木から頭一つも二つも

抜け出た巨大な木が聳(そび)え立っていた。
「クソ婆。本当にでけぇじゃねぇか。でもバス停からじゃさすがに見えねぇよ……」
俺と弟は行く足を速めて、その巨大な木へと歩を進めた。
大きさの所為か近くに見えた木が意外に遠い。
しかし、人間って生き物はゴールが見えると頑張る事ができる現金な生物で、距離はあったが、不思議と辛さは感じない。
巨大な木の下に着いた頃には一軒の小屋がすでに視界に入っていた。
地図の絵とはかけ離れた雰囲気の小屋だったが、そこは敢(あえ)て突っ込む事はせず、急ぎ駆け寄る。
平屋の古い家と言うか、小屋。
外には今時珍しく井戸があったが、苔塗(こけまみ)れな所を見るとさすがに使っては無いのだろう。
けれど、こんな森の奥まで水道ってのは通っているものなのか？
と疑問に思ったが気にしない事にする。
俺は古惚けたその小屋の扉を勢いよく開けて、声を張り上げた。

「遅くなってすいません！　孫の日向奔(ひなたはしる)と翔(かける)です。婆ちゃんいますか？」
玄関向こうに広がる木製の床で出来た長い渡り廊下に向かって大声を出すが返事がない。
それからも何度か「すいません。いらっしゃいませんか？」と繰り返す。
やがて廊下の奥から「何度も言わなくたって聞こえているよ！　年寄り扱いするんじゃないよ、まったく。」と悪態を付く年配の女性の声が聞こえた。
「絶対聞こえてなかっただろうが……」
「何か文句でも言ったかい？」
小声で呟いた声を見事に聞き取り、反応が遅かった割に地獄耳だった祖母の怒声が飛んできて、俺と翔は思わず口を手で塞いだ。

「まったく、誰だ――」
祖母らしき年配の女性が目の前で驚きの表情を湛えて立ち止った。
手に持っている蜜柑が床に落ちて、ぐちゃりとなる。
初めて会う孫に感動しているのか、まるで死人でも見るかの様な驚き表情。
「お婆ちゃん、初めまして。俺が奔で、こっちが翔です。」
人見知りの激しい翔は声を発さず、軽く会釈した。
祖母はまだ驚いているかの様な表情で右手を前に差しだし、ゆっくりと俺達に近づいて来た。
差し出しされた手の指先が何やら小刻みに震えている。
『予想以上に耄碌してんのかな？』と少し心配になる。
「そ、そんなに驚かなくても。確かに道に迷って一日遅れちゃったけど。」
「あんた達、死んだんじゃ……」
「は？　そんな大袈裟な、一日遅れたくらいで。」
「家族四人、事故で死んだって……」
「父と母は亡くなりましたが、俺達は生きていますよ。御厄介になると連絡を入れた筈なんですが？」
「あんた達、モンスターだね？　私を騙そうたってそうはいかないよ！」
「いや、ちょっと、婆ちゃん――ぐっ！」
祖母が手に持っていた杖を俺に向かって翳した瞬間、柄の部分に付いていた見覚えのある様な紫の球が光を放ち、放たれた光が俺の身体を貫く様に奔ったかと思うと同時に腹部に激痛を感じた。
「ちょっと、待ってくれよ。ってか一体今何したんだよ？」
「問答無用じゃ！　この変身モンスター！」
俺が両手を上げて降参のポーズを取った瞬間。
祖母は振り上げた杖をそのままに動きを止めた。
「お前、その腕のMagic reality deviceをどこで手に入れた？」

腕を見てみると見覚えのないブレスレットが嵌(は)められている。
そのブレスレットにも祖母の杖と同じ様な紫の球が嵌められているのに気が付いた。
祖母はブレスレットをとても気にかけている様だが、俺にはいつ嵌められたのか、これが何なのかも皆目見当(かいもくけんとう)がつかない。
「は？　何だって？」
「その腕につけているＭＲＤ(エム・アール・ディー)の事を聞いているんじゃ。」
「マジックなんとかだか、エムなんとかだか知らねぇけど、俺にはわけがわからねぇよ！」
「まぁモンスターがＭＲＤを付けているわけがない、話だけでも聞いてやろう。」
そう言って、祖母は杖を下したが、警戒した様子はそのままに、俺と翔を中へと招いてくれた。
古惚けた外見通りの古惚けた廊下を後に付いて進むと、祖母の寝室らしき部屋へと招かれた。
寝室には大きなパソコンが置いてあって、無数の配線が壁や床に張り巡らされていた。
その光景はまるで『電子の森』だった。
椅子に座るよう促された俺達は、軋(きし)みの激しい木製の椅子に腰かけ、バス停に着いてからここに来るまでの事や、自分達の事を思いつく限り祖母に話して聞かせた。
しばらく訝しげな表情で考え込んでいた祖母は、自分の頭の中身を整理するかの様に淡々と語り始めた。

「父親と母親を事故で亡くして、貴様らは祖母である儂を頼ってここまで来た。しかし、ここに向かう道中、不思議な人型の建造物を見つけ、それに触れて気を失った――と。お前達の言っている事が本当なら、お前達はもう一つの世界から来たのかもしれん。」
「は？　それはどういう――」
「多元世界(パラレルワールド)って事ですか？」

「は？　パラ……なんだよそれ？」
「考えられん事だが、どうもそうらしい。お前達がＭＲＤの存在を知らない事も頷ける。」
「こっちの世界では、それは当り前の物なのでしょうか？　それはお婆ちゃんが先程使った不思議な力と関係が？」
「おい、待て話を進めるな！　パラなんとかの件からもう一回――」
「お前達の世界には魔法も存在せんのか？」
今の質問の意味はわかる。
俺も翔もさすがに言葉を失った。
魔法なんてものはＲＰＧや御伽話だけの存在で現実にあるわけがないと言うのが俺達がいた世界の常識。
しかし、どうもこっちでは違うらしかった。
「魔法があるってのかよ？」
「あぁ、そこから説明が必要なのかい。少し長くなるぞ？」
祖母は億劫そうに眉間に皺を濃くして、俺と翔の顔を見渡してから確認する様に言った。

「結論から言えば、こちらの世界には魔法が存在する。しかし、それもほんの２０年ほど前に生まれたものだ。事の初めはＶｉｒｔｕａｌ　ｒｅａｌｉｔｙ　ｇａｍｅだった。そっちの世界にもゲームはあったじゃろ？　元は視覚や聴覚のみで楽しむ遊びだったそれに他の感覚機能への刺激を追加したのじゃ。痛覚や、触覚、味覚や嗅覚。そこまで来るとその世界は一種の仮想現実となる。ここまではわかるな？」
辛うじて、納得はできないが理解はできる説明に曖昧に首を縦に振ると、祖母は湯飲みの茶を一口飲み、続けた。
「大勢の人間がそれに没頭したよ。その内に今度はアダルトな目的に使用され始め、仮想現実で男は絶世の美女を抱き、女は絶世の美男子に抱かれたわけだ。そこまで来るとＶＲ《仮想現実》技術が進歩し、普及するのはあっという間じゃったさ。ひっひっひっ――」

と下卑た笑いを浮かべる祖母。
アダルトなの件(くだり)辺りから慌てて翔の耳を抑える俺。

「兄さん。今、お婆ちゃんなんて？」
「世の中には知らない方がいい事もあるんだ。さぁ婆ちゃん続けてくれ。」
「人間は完全にＶＲにのめり込んだ。すべての欲望を満たしてくれるわけじゃから当たり前じゃな。しかし、人間とは愚かな生き物で遂にはそれだけでは飽き足らず、ＶＲの外、つまり現実の世界に仮想を持ち出そうとしたんじゃ。それが魔法の始まりじゃ。儂の杖や、奔のブレスレットの様なＭＲＤが開発された。ＭＲＤを介(かい)せば、仮想を現実に変えられる様になったわけじゃ。」
「――そりゃあ一体どういう仕組みなんだよ？」と俺は腕のブレスレットを睨み付けた。
嵌めこまれた紫の玉が鈍く光った気がした。

「研究の結果、ＭＲＤを介して仮想を現実に変えられる量には個人差がある事が分かった。その力を魔力と呼んだ。魔力の多い者ほど大きな仮想を現実へと変える事ができるし、魔力の小さい者は小さな仮想しか現実にできん。まぁそんな魔法に関しての研究を魔科学と呼び、日夜研究され始めたのが最近の事じゃ。ＭＲＤを悪用してモンスターを生み出す輩が現れだしたのも最近の事じゃが……」
「モ、モンスターがいるのかよ？」
「召喚魔法と呼ばれる技術じゃな。かなりの魔力がないと出来ない事じゃが、ＭＲＤを持ってすれば可能じゃ。勿論(もちろん)、魔科学に関しては魔力の大小や召喚魔法以外にも色々あるが、それは追々《おいおい》でいいじゃろう。大体この世界の事はわかったか？」

正直いまだに理解はできても、納得はできない。
信じる事ができないと言った方が正しいか、祖母の話は俺達の世界

では漫画や小説なんかで描かれる空想の話と何ら変わらない。
けれど祖母が不思議な力を使うのを目の当たりにした俺達は信じるしかなかった。
そんな世界に飛ばされたのなら、俺達が時空を飛び越えたのも強ち(あなが)あり得ない話でもない。
「それじゃあ僕達はそのＭＲＤの力でこの世界に呼ばれたって事になるのかな？」
一瞬、困惑した表情を浮かべた祖母だったが、自信なさげにゆっくりと答えた。
「正直、それは考えられん。時空転移や時間転移は理論上は可能だが、あまりにも膨大な魔力が必要で、そんな魔力を持った者は絶対に存在するわけがない。もしそんな化け物じみた魔力を持つ者がいたとしても、現存するＭＲＤでは、そこまで強大な魔力に耐える事は絶対にできん。」

この世界の事は大体把握した。
俺達の世界とは別の選択をしたもう一つの世界。
並行世界、多元世界とかって呼ばれるものらしいけれど、正直そんな事はどうでもいい。
何故俺達がこの世界に来る事になったのか？　そしてどうすれば、元の世界に戻る事ができるか？　そっちが知りたい。
けれど、俺達にとって最重要のその問題に関しては、解決の糸口すらも掴めず、祖母には皆目見当(かいもくけんとう)がつかない様子だった。
もちろん、俺達にも分かるはずもない。
そして、あの大きな人型の建造物は一体何だったのか？
大きな疑問を無数に残したまま、俺達兄弟はこっちの世界で暮らす事を余儀なくされた。

002

「翔、お前は何を読んでんだ？」
俺と翔は空を走るバスに乗せられていた。
内装や外観は俺達の世界のバスとなんら変わりないが、こっちのバスは空を飛ぶ。
俺と翔は祖母に「しばらくこの世界で生活するのなら――」と半ば強引にこの奇妙なバスに乗せられ学校へと向かっている。
向こうの世界でも通う筈だった学校『県立謳花学院』。
けれどその名称はこっちの世界では若干異なって、『魔立謳術学院』。
最早、聖なる学び舎とは思えないアニメチックな名前がついているのである。
「そもそも『魔立』ってなんだよ？」という葛藤と戦いながらもバスに揺られているというわけだった。

「……こっちの世界の僕は凄く優秀な魔錬師だったみたいだから、予習を、ね。」
魔錬師とは『仮想を現実に成す者』の総称らしい。
こちらの世界でも我が可愛い弟は優秀だったと祖母に聞かされた。
さらにはこちらの世界でも俺は駄目な兄貴だったと出来れば知りたくはなかった情報も聞かされた。
直向きに教科書を読み続ける翔の顔を一瞥した後、外に視線を投げた。
空飛ぶバスはいつの間にか森林地帯を抜けて、街へと出ていた。
目の前に広がる街は、俺の知る街と大きな違いはなかった。
空飛ぶ車やバスやトラックが目の前を走り過ぎていく事。
そして、高層ビルの数が俺の知る街よりも２００％程アップしている気がする事を除いては。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

学校前のバス亭で降りると更に予想外な展開が俺達兄弟を待っていた。
教科書を手放そうとしない翔の手を引いてバスを降りると大勢の女学生が翔へと群がってきたのだ。
俺は鼻息の荒い女学生たちの勢いに気押され、あっさりと翔を差し出し、自分はそそくさとバス停のベンチへと非難した。
教科書に夢中になっていた翔は気が付いた時には女学生の群れに飲み込まれたのだろう。
揉みくちゃにされながら、甲高い悲鳴を上げた。

俺が避難先のベンチで足元にある雑誌に気がついて拾い上げると、そこにはでかでかと翔の写真が載っていて隅には小さく俺の写真も載っていた。
『奇跡の生還！　天才魔錬師、日向翔とその兄』
「その兄って……、俺も奇跡の生還者って事になってんだから友人A的な扱いしてんじゃねーよ。」
その見だしの後には翔が如何(いか)に凄い奴かって事が書き連ねられていた。
どうやらこちらの翔は俺達がいた世界の翔より圧倒的な有名人だったらしい。
『最年少、最上級魔錬師』『新術式開発』『天元十師任命』。
記事に書いてある翔の経歴にはよく分からない単語ばかりだが、凄い奴だったって事は不思議と伝わってくる。
「こっちの俺は俺よりも劣等感があったかもしれないな。」とこちらの俺の心中を想像し、思わず自嘲を浮かべた。

「に、兄さん、助け――て――」
バス停のベンチに腰を降ろし、呑気に拾った雑誌を読んでいた俺がやれやれと首を振りながら女学生に囲まれた翔を救出に向かおうとした時だった。
眩い閃光が視界の左端で弾け、足元の石床が砕けて飛散した。
そして直後に地面を揺るがすほどの轟音が鳴り響く。
俺は砕けた石床の飛礫(つぶて)が脛(すね)に直撃し、痛みのあまり涙ぐんでその場にしゃがみ込んだ。
一体何が起こったのかと辺りを見渡すと、翔に群がった女生徒達が後退(あとずさ)りしながら口ぐちに呟いた。
「……この魔法、下級師クラスの千早世良羅(ちはやせらら)じゃない？」
「雷神、世良羅……。」
不安げに呟く女生徒達の表情が恐怖の色を深める。
そして視線が一点に集中し、俺はその視線の先を追った。
周囲の視線を一身に受け、淡々と歩を進めるのは同じ学生服をきた少女。
毛先にカールのかかった腰くらいはある長い金髪、大きくて少しつり上がった気の強そうな金色の瞳。
身長は翔くらいだろうか、俺よりは少し小柄な目も眩む様な美女が立っている。
「神々の畏(おそ)れたる雷鳴よ――」
「やばくない？　また詠唱してるんじゃ？」
「我が猛る怒りをその神槍(しんそう)に宿し――」
小さな声で何かを呟きながら歩を進める世良羅と呼ばれた美女。
恐れ慄(おのの)く女学生達。
やがて、世良羅を薄らと光が包み周囲には電流の様なものが見え始め、所々で火花が散り始めた。
目の前を通り過ぎながら火花を散らす奇妙な世良羅のあまりの美しさに迂闊(うかつ)にも瞳を奪われた。

「――兄さん！　その娘、序歌を詠んでる！　本気だよ！　早く止めて！」
見惚れて呆けていた意識が翔に引き戻され、言葉に従い世良羅の括れた細い腰を一心不乱に抱き止めた。
振り向いた、世良羅の顔に驚きが宿る。
ふっくらと柔らかそうな唇から紡ぎだされた言葉は「馬鹿？」。
その直後、目の前に走る閃光。
激しく身を撃つ激痛。
薄れゆく意識の中に仄かに鼻を擽る世良羅の香り。
激痛と世良羅の柔かさから出でる恍惚により俺の意識はやがて途絶えてしまった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

消毒液の香りと肌を擦れる覚えのある独特な感覚。
目を開けると、見覚えはない場所だったが何故か懐かしい風景。
「――保健室か？」
誰に呟いたでもなく言葉を発した喉は驚くほどに掠れていた。
「確か俺、あの金髪巨乳に――」
目を擦りながら呟いた俺の右頬に痺れる様な痛みが走る。
静かな部屋に響き渡る乾いた炸裂音。
半開きだった目が一発で見開き、目に入ったのは先程の金髪美女、世良羅。
「えっと、あなた様は……どなた様？」
「やっぱり触っていたのか！」
釣り上がり気味の目尻がさらに釣り上がり、金色の瞳はきらきらと潤っている。
再び響く炸裂音。

右の頬をぶたれたら左の頬を差し出せと言うが、差し出す前に左頬はぶたれてしまった。
「何すんだ！　痛いだろうが！」
「私の胸を触っただろう！　触られた感触はあったんだ！　私の事を巨乳などと辱めたのが何よりの証拠だ！　この変態め！」
「触ってねぇよ！　あんたの胸がでかいのくらい見ればわかるだろうが！」
「やはり見てはいたのだな！　見ていたら触りたくなったのだな！　確かに聞いたぞ！　恥を知れ！」
怒声を捲し立て目に涙を溜める世良羅を見ていると、何だか自分が悪者の様な気がしてきた。
俺はそんな無意味に湧き出た謎の自責の念を振り払う様に首を左右に振ってから仕切り直す事にした。
「まぁとにかくあんたも俺に電撃くらわした上におまけの往復ビンタもかましたんだから、あいこでいいだろう。」
そんな言葉では勿論納得しないであろう世良羅は俺を睨みつけ肩を震わせていたが、力一杯鼻を啜って、目に溜まった涙を制服の袖で拭った。
「電撃をくらわす、と言うがあれは君が悪いのだろう。序歌を詠唱している帯魔状態の私に抱き――掴みかかったのだからな。それに直前に私の電撃を見ているのだから、私が魔力放出系の魔錬師だと分かっていたはず。そんな私の帯魔状態の胸――いや、腰に掴みかかれば当然あぁなるだろう。」
この世界では当然の用語なのだろうか、時折不自然に顔を赤らめながら小難しそうな用語をつらつらと人差し指を立てながら語る世良羅。
「まぁな。」と分かったふりをして相槌をうち、「でも止めなきゃ撃っていたんだろう？　何であんな事をする？」と問うと世良羅の表情が強張るのが見えた。
折角目尻が下がり和らいだ表情になったのに、その問いに再び目尻

が釣り上がる世良羅。
「目障りだった。それにあそこにいたのは天才魔錬師の日向翔だろう？　ならお前が止めなくても私の魔法くらいあいつが防いでいたさ。」
顔を背けて、嘲笑を浮かべながら簡単に言ってのける世良羅を見て、胸がざわつくのを感じた。
この世界はこんなにも簡単に人を傷つける事を冗談みたいにやってしまうのか？
それが怖かった。
ゲーム感覚なのかもしれない。
VRから派生した様な今のこの世界ではこれが当たり前なのだろう。
本来この世界の人間ではない俺には、そんな事は到底納得が出来なかった。
考えるよりも先に身体を動いていた。
言い終わってその場を去ろうとする世良羅の腕を掴む。
驚いた表情で世良羅は腕を掴む俺を見返した。
傷つけるつもりなんてないのに、不思議と掴んだ手に力が入る。
そこから敵意を感じたのか身構える世良羅。
「魔法だか何だか知らないが、二度とあんな使い方をするなよ。」
俺の言葉に拍子抜けした表情になった世良羅は俺の腕を煩わしいといった態度で払った。
緊張が解けたのか竦めていた細い肩が少し下がる。
「君に指図される謂れはない。」
大袈裟な程にツンとした態度を取ってその場を去る世良羅に俺は何も言えなかった。
確かに謂れがない。
彼女達の常識と俺達の常識の隔たりを確かに感じた気がした。

「そんな事はないと思うよ。」
聞き覚えのある声。

世良羅が開けっ放しのままにしていった扉の外に翔がいた。
「今日一日、こちらの世界の人達を見ていたけど僕達とそう変わらないよ。彼女もきっと悪いと思ったから兄さんの傍に一日中付いていたんじゃないかな。」
「お前はエスパーか？　兄の心を読むな。」
舌を出して、照れ笑いを浮かべる翔にベッドを下り、鼻の頭をこずいてやった。
そこで俺はやっと聞き捨てならない言葉に気が付き、不覚にも素っ頓狂（とんきょう）な声を上げてしまった。
「――え？　一日中？　入学式は？」
ハンガーに掛けた制服の上着を羽織りながら外を見るとすでに茜色の空が広がっていた。
保健室の出入り口で状況がいまいち飲み込めず硬直する俺の肩に、そっと手を乗せた翔が首を左右に振って溜息（ためいき）混じりに呟いた。
「全部、もう終わっちゃったよ。」
こうして、俺の記念すべき学園生活一日目は人知れず、いや、俺知れず終わりを告げた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

日が沈み、闇に包まれた山道の上空を来たバスの乗って帰る。
俺達の世界では二時間に一本のバスも、こっちの世界では大幅なショートカットのお陰か十五分に一本は来るから乗り逃す心配もいらない。
良い子の俺や翔はすでに眠っている時間まで走っているくらいに終電も遅い。
さらにはバスを降りれば、徒歩五分で祖母の家。
あの暗くて恐ろしい山道を震えながら歩いていたつい先日の事が嘘

の様に快適だった。
夜も更けて、家に帰り着いた俺と翔は祖母と暖炉を囲んでいた。
この時代に、しかも俺達より更に科学が発達している世界で暖炉は時代錯誤もいいところだが、古臭い雰囲気は嫌いじゃない。
ほんのりと明かりの灯った部屋で鍋をつつくのは、まだ少し混乱する心を落ち着かせてくれる。

「婆ちゃん、こっちの翔があんなに有名人だなんて聞いてないぞ。バレちまうんじゃないか？」
「翔は自分の力や知識をひけらかす様な子じゃなかったから大丈夫だろう。――求められた時に結果さえ出せればね。」
「無責任だな。俺なんて今日死にかけたってのに。」
「大丈夫。あんたはちょっと死にかけるくらいに間が抜けているほうがリアリティがあるってもんさ。」
横を見ると姿勢を正して食事を食べながらも教科書を読む翔がいた。
懸命に勉強する弟とまだ教科書を開いた事すらない兄。
確かにこの構図がこっちの世界のリアルでもあったのだろう。

俺達が通う事になった謳術学院は俺達に馴染(なじ)みのある学年制ではなく、階級制という制度があった。
下級師クラス、中級師クラス、上級師クラス、そして最上級師クラス。
年齢に関係なく、試験に受かったものが進級できる実力主義の学校。
俺と翔は下級師クラスに入学する事になった。
こっちの世界の俺達も謳術学院の下級師クラスに入学する予定があったらしく、案外とすんなりいった。
最上級師だったこっちの世界の翔は兄の俺と同じクラスを望んで下級師クラスへと編入したらしい。
まるで祖母の家に行く事を決めた時の俺達みたいに、こっちの世界の俺達も駄目な兄に弟が付き添うという構図は皮肉な程にそのまま

だった。

003

入学式の翌朝、昨日の事もあって少し早めに家を出た俺と翔は空飛ぶバスに乗って学園へと向かっていた。
翔の耳には祖母からもらったＭＲＤが紫色の輝きを放っている。
ＭＲＤとは紫色の玉を差しており、それ以外の装飾はまちまちの様だ。
（翔のＭＲＤの方が洒落てるじゃねー）
と腕のＭＲＤに視線を落とした。
祖母もこのＭＲＤのモデルは見た事がないと言う。
この異世界に飛ばされた事に何か関係があるのだろうか？
そんな事を考えている間に学院の前へとバスが到着した。

昨日の騒ぎで懲りたのか、それとも時間をずらした事が功を奏したのか翔の追っかけらしき女学生達が今日はいなくて、ホッとした。
がその安心も束の間で更に会いたく人間が不機嫌面をぶら下げてこちらに向かってくる。
相変わらずの美しい容姿。
周りが霞むほどに目立つ、カールの掛かった金色の髪に勝気な金色の大きくてやや吊り上った瞳。
さらにはワイシャツのボタンが弾けんばかりの大きな胸に、それに反比例するかのように括（くび）れた腰。
昨日の事がなければ、危うく一目惚れしてしまうところだ。
思い返して無視するべきかと迷ったが（同じ下級師クラスだから気まずくなりたくはねぇな。）
そう考えた俺は引きつる頬の表情筋を総動員して吊り上げ、勤めて明るく手を上げて「世良羅さん！　おはよう！」と挨拶をしたが、世良羅はあっさりと俺の前を通り過ぎた、聞こえなかったわけじゃ

ない。
すれ違いざまに「ふん。」と鼻を鳴らしていたから間違いない。
「あんた、そんなんじゃあ友達できねぇぞ。」
ついつい悪態(あくたい)をついてしまうのが俺の悪い癖だ。
俺の前を過ぎ、数歩先で足を止めた世良羅が小刻みに肩を上下している。
（あ、やべぇ。）と思った時にはすでに遅く、不機嫌面に磨きのかかった世良羅が振り返り、つかつかとにじり寄って来た。
「世良羅と呼び捨てにされるのも気に入らないけれど、あんた呼ばわりはもっと気に入らない！　初対面なんだから千早さんと呼びなさい！」
「いや、おい、初対面って――」
「うるさい！　うるさい！　うるさーい！　君に出会った昨日を消したいわ！　今日も会わない様に早く家を出たのになんでいるの？　今日も消してしまいたくなってしまったわ！」
「そりゃあないだろ――」
「とにかく、いいから、黙って聞きなさい。今後一切、私に話しかけない近寄らないを貫きなさい！」
肩を大きく上下させ、息を切らすほどに言葉を吐き出した世良羅が俺の返事を待つことなく勢いよく前に向き直り、再び歩き出した。
心配そうに俺の裾を引っ張る翔に急かされるようにして、俺達も後を追って学園へと向かった。

昨日バタバタしていてよく見れなかったせいか、すごく新鮮に見える学園。
学園の門は童話に出てくる巨人でも潜れそうなくらいに大きく、白い支柱は毎日磨かれているのか顔が映りそうなくらいに綺麗で朝日を反射して輝いている程だ。
一歩門の中に入ると緑の多いキャンパスが出迎えてくれた。
装飾の施された豪華な花壇によく手入れされている植木が並んでい

る道を通って学院内へ。
玄関は吹き抜けになっていて、朝日が溢れんばかりに差し込んでくる。
長い廊下は突き当りが見えないほどに続いている。
外から見ても敷地が大きい事は分かっていたが、中に入ってみるまでまさかこれほどとは思っていなかった。
「驚いたでしょう？　僕も昨日は凄く驚いたよ。」
確かに驚いた。
俺達のいた世界の学校とは大きく異なるその光景はここが異世界なのだと再認識させてくれるには十分すぎた。
俺は翔に案内され、教室へと向かう。
向こうの世界と同じように『理科室』や『家庭科室』なるものがあったが、中には『方陣室』や『召喚室』となるべくお近づきになりたくない部屋もある。
『下級師クラスB組』と書かれた部屋の前で翔が「ここだよ。」と俺を中に入るように促(うなが)した。

どうやら下級クラスの中でも組分けがなされている様でA、B、C組の内、俺と翔はB組になったみたいだ。
大きく息を吸い込んで扉に手を開けた。
昨日は一度も教室に顔を出せず、クラスメイトとも面識はない。
気分はすでに転校生だ。
元々、異世界からの転校生みたいなものだが、翔に先を越されたのが孤独感を増大させる。
目を強く瞑り、木製の白い扉に手を掛けて勢いよく開く。
好奇の目で見られるのか、疎外的視線を向けられるのか、はたまた……
「って誰もいねぇじゃねぇか！」
綺麗に整列された机と椅子には誰もおらず、電気もついていない教

室に俺の渾身の突っ込みだけが響き渡った。
「ま、まだ早いからね。」
苦笑いを浮かべてそう言う翔を見返し、どうしようもなく恥ずかしくなった俺だったが兄の威厳を保つべく平静を装って席へと着く。
「兄さん……」
「なんだ、翔？　お前も早く席に着け。」
「そこ僕の席なんだけど……」
動揺のあまり席に書かれた苗字だけを見て、うっかり翔の席に着いてしまった俺は視線を翔には向けずにそっと尻を椅子から浮かせてすぐ後ろの自分の席へそそくさと移動した。
それからHR（ホームルーム）が始まるまで翔と目を合わせる事ができなかったのは言うまでもない。

クラスメイト達がぱらぱらと登校してきて、無人だった教室の席が次第に埋まり始め、心なしか電球の照度が上がり、気温も上がっていく様な気がした。
冷たく恐ろしいイメージのある無人の教室が、人が一杯に入った途端に活気が溢れ雰囲気が大きく変わるのだから不思議だ。
人懐（ひとなつ）っこい者はすでに友達が出来ているのだろうか、挨拶を交わす者や机を挟んで会話している者がいる。
俺は生来（せいらい）、人見知りはしないが決して人懐っこいタイプではないので黙して机に座しながらも周囲のクラスメイトをチラ見する。
始業のチャイムが鳴り、席に着かずに楽しげに会話していた連中もそのチャイムに慌てて自分の席に着席する。
チャイムから教師が扉を開くまで、数分の静寂があり、その間何故だか無駄に緊張してしまった俺はお尻の辺りにじんわりと汗をかいた。
扉を開けて入って来た女教師と思（おぼ）しき人物は俺とそう歳が変わらないくらいに若かった。
眉辺りで綺麗に切り揃えられた黒の前髪。

肩の下で綺麗に切り揃えられた黒の後ろ髪。
スーツも黒。
中に着ているシャツも黒なら、瞳の色も黒、マニキュアまで黒で、恐らく下着も黒なのだろう。
グラマラスな体系を黒で無理矢理引き締めた女教師は油断からだろうか、はたまた過信なのだろうか、黒いシャツの胸元は第三ボタンまでおっぴろげで飛び出さんばかりの巨乳と言う括(くく)りにはすでに収まり切らないであろう爆乳をひけらかしている。
本当にこれは教師なのだろうか、と疑いたくなるほどに目つきの悪い黒づくめの女教師が教壇に立ち、ファイルを叩きつけた。

「ゴミ虫共。出欠を取るからハキハキ返事をしさらせ。」
（いや、教師じゃねーだろ。こいつ。）
「えー、クソ安藤。」
「は、はい。」
「あー、ゴミ浦田。」
「ゴ……、はい。」
「クソ」だの「ゴミ」だのを生徒の名前に付け加えつつ女教師の点呼は続く。
「クソビッチ千早……、千早世良羅は今日もいねぇのか？」
世良羅が同じクラスだった事に俺は初めて気が付いた。
辺りを見渡すと空席が一つ。
あそこが世良羅の席なのだろう。
朝、校門の前で会ったから登校はして来ているはずなのだが、なんて考えたが報告する義務はないのでそのままスルーする事にした。
何せ俺は冷徹な男ではないにしろ、お節介(せっかい)を焼くタイプでもない。
そして更に点呼は続き――
「えっと、昨日女にのされた哀れで惨めなゴミでクズな日向兄。」
こめかみの辺りが脈打ったのを感じたが、世渡り上手を駆使しつつ足りない能力を補う人生を送ってきた俺は心を落ち着かせて笑みを

湛(たた)えて返事をした。
出欠の点呼を取り終わり、女教師は右手で頭を掻き、左手をシャツの下から中に突っ込み腹を掻きながら話し始めた。
乱暴に突っ込まれた左手とシャツの隙間から覗く、ヘソのチラリズムは男子生徒の思春期ゆえの妄想をかき立てるには十分過ぎるものだったので、心の中で（ご馳走様です。）と呟いた。
性格は明らかに悪い女教師だが、補ってあまりあるほどに容姿がいいのは認める。
先程の罵倒(ばとう)はすでに頭の片隅にすらなく、（楽しい学園生活になりそうだ。）などと頭に花を咲かせている。
「あたしが雑魚下級師クラスB組の担任をする事になった、最上級師クラスの御手洗静琉(みたらししずる)だ。とりあえずはあたしが卒業するまではここの担任をするからな。口を噤(つぐ)んで、ただただ付き従え、そして敬(うやま)え！」
前の席に座っていた翔が振り返り俺に説明をしてくれた。
どうやら、俺達の世界で言う教師とは異なり上級生が下級生の教師を務めるシステムらしい。
だから当然教師になる者に人間性を求めてはいけないと言うことになるのだろう。
「――おい、日向兄。あたしが喋っているのだから地蔵の様に口を噤(つぐ)んで話を聞け！」
静琉は俺を一喝して教壇から降り、淡々と語り始めた。
踏み出す度に上下する静琉の胸部に男子の視線は集中したが、この世界に慣れない俺には静琉が語る話の方が興味を引いた。
「貴様らは最下級のクズだから基本から説明してやるが、そもそも魔法と言うのは名ばかりで正しくは我々魔錬師は想像を具現化する事により、特殊な力を発揮する。」
ここまでは祖母の説明で理解もしているし、仕組みはわかっていないがその事実に対しては納得している。
「この想像を具現化する行為を【錬成】と呼ぶが、錬成するには手

順がある。まずは【思念化】。色や形などをできるだけ具体的に想像する事だ。そして次に【流動化】。思念化により想像した対象及び部位に魔力を流し込む事だ。例えば炎を口から吐き出したいと思念化した力を錬成したいのなら、口腔内に魔力を流し込まなければならない。その行為を流動化と呼ぶ。そして、最後に【集束化】。先程の例えで言えば、口腔内に流し込んだ魔力を集束して、思念化情報を具現化する作業だ。思念化、流動化、集束化の三点が上手く行われる事で魔法の練成は完了する。」

正直、そんなに簡単なのかと唖然(あぜん)となった。

もっと代償的な物が必要だったり、煩(わずら)わしい手順を踏まなければ魔法は使えない物だと思っていたからだ。

口を開けて呆けている俺を一瞥した静琉は眉間に皺を寄せて続けた。

「――最下級のゴミである貴様達でも分かっているとは思うが、思念化、流動化、集束化は簡単な事ではない。思念化する為には【フォーマット】をＭＲＤにインストールしなければならないし、流動化で上手く魔力を供給しなければならず、それにはＭＲＤの操作を熟知していなければならない。さらには集束化で供給した魔力を凝縮し具現化しなければならないが、それにはコツや才能が不可欠だ。」

教鞭を伸ばし、俺を指す様にして振り回す静琉。

明らかに俺に向けて言っているのだろうと推し量るのはその態度からも容易である。

静琉は教鞭を自分の肩に担ぐ様に置き、面倒臭そうに欠伸(あくび)まじりでさらに続けた。

「まぁ色々と制約はあるにしろ、簡単な魔法錬成は義務教育のガキにだって使える。この学園は貴様ら雑魚を人の役に立てるレベルの魔法錬成が行える様にする為の施設だ。――さぁ貴様らの足りない脳味噌で理解できたなら体育館に移動するぞ。」

暴言を一通り吐き終わりすっきりしたのか、静琉はやっとの事で笑顔を浮かべた。

しかしその笑顔に仄かな恐怖抱く俺達生徒は言われるままに静琉の後に従って体育館へと移動し始めた。
長い廊下を渡り、学園内の最深部にある体育館へ。
教室のある中心部から最深部の体育館までは歩いて１５分近くもかかったからこの学園の不気味なまでの巨大さを身体で認識する事が出来た。
体育館は木目状の床に綺麗にワックスが掛けられていて、様々な色のテープで線が引いてある。
ここまでは俺達の世界とそう変わらないのだが、やはりこの学園の体育館だけあり、広さは馬鹿げていた。
バスケットボールのコートなら１０個くらいは作れそうな、グラウンド並の広さを誇る体育館など見た事がない。
俺達の組が一番早かったようで、同じ様に担任に率いられ、不安そうな面持ちで他の組の連中も体育館へと入って来た。
組ごとに整列させられ、姿勢を正して待つと、眼鏡をかけた前髪の無駄に長い男が体育館奥のステージの上に立った。

その時、後方にある体育館の扉が大きな音を立てて開いた。
生徒達全員が突然の大きな音に驚き、一点に視線が集中する。
俺も同じように音のする方へ視線を向けると不貞腐れた顔をした世良羅が立っていた。
制服の上に羽織った白いカーディガンの裾（すそ）を伸ばして掴む様にしながら歩を進める世良羅は注目されて恥ずかしいのだろうか、肩を竦めており耳は赤くなっている。
「み、み、見てんじゃないわよ！」
恥ずかしさに堪（たま）りかねたのか顔まで赤らめて怒声を発する世良羅。
周囲の空気が帯電した様にパチパチで火花を散らせた。
「遅れてきておいて見るなじゃないだろうが、このクソビッチ。さっさと列に並べ。」
ただでさえ目立つ容姿をしているのに、あの性格では翔をぶち抜い

て学年一の有名人になる日もそう遠くはないだろうと俺は嘲笑の笑みを浮かべた。
さすがの世良羅も静琉に叱責されて、大人しく列へと並んだ。
顔は相変わらずの不機嫌面だったが、元々あぁいう顔なのだろうと思えばいい加減気にならない。

「ごほごほっ……私、学年主任の駿河志智郎（するがしちろう）と申します。昨日からの入学式等色々お疲れさまでした。ごほっぐほっ……。」
世良羅に集まった視線を遮（さえぎ）るかのように、咳き込みながらも丁寧な言葉で喋る志智郎は少なくとも静琉や世良羅よりも随分とまともに見えた。
ただし顔色はすこぶる悪い。
「失礼します。」とがらがら声を発し、後ろを向いてさらに激しく大きく咳き込む姿は、あんまりまともではなさそうだと一瞬で俺の考えを改めさせる。
「失礼しました。私、あまり身体が丈夫ではないもので……。話を続けます。貴方達はこれから最上級師を目指してこの学び舎で励むわけですが……ごほごほっ。」

「――とその前に一度死んで頂きましょうか。」
長い前髪の隙間から除く眼鏡の奥で妖しく輝く眼光。
志智郎の言葉の意味を飲み込む前に視界は一瞬で漆黒の闇に包まれた直後、足元が崩れ去るような感覚に襲われた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6941y/

ゴーレムマイスター

2011年11月30日15時47分発行